

優秀演題候補セッション（口演）

■ 2026年10月18日(日) 9:50～10:30 | 第8会場

[AO] 優秀演題候補セッション（口演）2

座長: 灘井 雅行(名城大学薬学部 薬剤学研究室 教授), 関根 祐子(千葉大学大学院薬学研究院)

[AO-05] 薬局プレアボイド報告を用いた処方の問題点予測AIの開発の試み

佐藤 宏樹^{1,2}, 中島 怜¹, 柳 奈津代¹, 小林 範博³, 河野 通丈³, 月岡 良太³, 伊藤 紗代¹, 澤田 康文¹ (1. 東京大学大学院薬学系研究科, 2. 東京大学大学院情報学環, 3. アイングループ (株) アインホールディングス)

[AO-06] バーチャル患者で学ぶ、漢方医学の診断法「舌診」ー生成AIと舌撮影解析システムTIASの活用ー

村上 綾^{1,2}, 中口 俊哉³, 伊藤 亜希⁴, 森田 智², 勝野 達郎², 住野 彰英¹, 速水 耕介¹, 並木 隆雄⁵ (1. 横浜薬科大学薬学部 食化学研究室, 2. 千葉大学 墨田漢方研究所, 3. 千葉大学 フロンティア医工学センター, 4. 横浜薬科大学漢方治療学研究室, 5. 国際医療福祉大学病院 成田病院 予防医学センター)

[AO-07] 災害対策用安定ヨウ素剤の使用方法に関する理解度調査および保険薬局薬剤師による服薬支援

竹島 幸亮¹, 小山 琢司², 佃 主税³, 重森 亮有樹⁴, 山崎 美佳^{5,6} (1. 総合メディカル (株) そうごう薬局 安来店, 2. 北堀店, 3. 安来社日店, 4. 東出雲店, 5. 島根大学前店, 6. 総合メディカル (株))

[AO-08] 医薬品の廃棄方法に対する薬剤師の介入効果の検討

齊藤 紗紀¹, 池端 たすく², 高橋 香奈³, 森山 愛理⁴ (1. (株) なの花北海道 なの花薬局札幌二十四軒店, 2. 小樽築港店, 3. まさかえ店, 4. 小樽稲穂2丁目店)

優秀演題候補セッション（口演）

2026年10月18日(日) 9:50～10:30 | 第8会場

[AO] 優秀演題候補セッション（口演） 2

座長: 灘井 雅行(名城大学薬学部 薬剤学研究室 教授), 関根 祐子(千葉大学大学院薬学研究院)

[AO-05] 薬局プレアボイド報告を用いた処方の問題点予測AIの開発の試み

佐藤 宏樹^{1,2}, 中島 怜¹, 柳 奈津代¹, 小林 範博³, 河野 通丈³, 月岡 良太³, 伊藤 紗代¹, 澤田 康文¹ (1. 東京大学大学院薬学系研究科, 2. 東京大学大学院情報学環, 3. アイングループ (株) アイホールディングス)

【目的】薬局プレアボイド報告には、薬剤師が処方監査や患者対応で発見した臨床的リスク（処方の問題点）が記録されているが、報告内容は多様な自由記述を含み、日常業務で体系的に活用するには課題がある。本研究では、薬局プレアボイド報告から処方の問題点を抽出し、患者情報および処方から薬剤師が確認すべき潜在的な問題点を予測するAIの開発を試みた。

【方法】保険薬局グループで収集された薬局プレアボイド報告12,490例を対象とした。まず、分類基準に基づき再分類した1,249例を用いて、BERTによる問題点カテゴリー分類モデルを構築した。次に、大規模言語モデルLlama-3.1-Swallow-8B-Instructを用いて、報告内容から具体的な問題点を文章として生成するモデルを構築した。さらに、生成された問題点を教師データとし、患者情報と処方から想定される問題点を3つ提示する予測モデルを作成した。予測モデルは、学習前後で教師データとの類似度、問題点の一致、薬学的観点からの妥当性を比較した。

【結果】BERTによる分類では、用法用量や重複投与など一部のカテゴリーで良好な性能を示したが、カテゴリー間で精度に差を認めた。生成モデルでは、評価した125例中111例（88.8%）で妥当な問題点が生成された。予測モデルでは、学習後に教師データとの類似度が0.524から0.637へ改善し、問題点が一致した事例も12例から31例に増加した。

【考察】薬局プレアボイド報告を用いることで、実際の薬剤師の介入事例に基づき、処方監査や患者対応で確認すべき問題点を予測できる可能性が示された。今後は、予測精度の向上、ハルシネーション（根拠が不十分な出力）対策、薬歴・併用薬・副作用歴等を含む詳細な患者情報の組み込みを進め、薬剤師による薬歴確認や患者との対話を支援する補助ツールとしての活用を目指す。

優秀演題候補セッション（口演）

2026年10月18日(日) 9:50～10:30 | 第8会場

[AO] 優秀演題候補セッション（口演） 2

座長: 灘井 雅行(名城大学薬学部 薬剤学研究室 教授), 関根 祐子(千葉大学大学院薬学研究院)

[AO-06] バーチャル患者で学ぶ、漢方医学の診断法「舌診」 ―生成AIと舌撮影解析システムTIASの活用―

村上 綾^{1,2}, 中口 俊哉³, 伊藤 亜希⁴, 森田 智², 勝野 達郎², 住野 彰英¹, 速水 耕介¹, 並木 隆雄⁵ (1.横浜薬科大学薬学部 食化学研究室, 2.千葉大学 墨田漢方研究所, 3.千葉大学 フロンティア医工学センター, 4.横浜薬科大学漢方治療学研究室, 5.国際医療福祉大学病院 成田病院 予防医学センター)

【目的】 舌診は、患者の舌色や舌苔を観察することで体質や病状を把握する、漢方医学で用いられる重要な診断方法の1つである。しかしながら、舌を観察する際の照明や、観察者の知識・経験の影響を受けるため、舌診技術の習得には時間を有する。書籍やインターネットでは舌の静止画の掲載が主であり、実際の舌診時間が体感できないなど、学習内容は限定的である。そこで、今回我々は、生成AI（人工知能）を用いたバーチャル患者を作成し、目の前で患者が挺舌しているように学べる新しい舌診教育動画を作成することで、この課題の解決を試みた。

【方法】 我々は、照明の影響を受けずに舌写真を撮影でき、さらに舌色を正確に記録できる撮影解析システム（tongue image analyzing system：TIAS）を開発し、これまでに千葉大学医学部附属病院和漢診療科を受診した患者の約1300枚の舌画像をデータベース化してきた。今回、舌画像データベースの中から、舌診学習に最適な病態舌を選定した。次に、肌色などの特徴を再現したバーチャル患者を作成した。このバーチャル患者と、TIASで撮影した患者の本物の舌画像を合成し、挺舌の動きを生成AIにて再現した。

【結果】 作成した教育動画には、(1) 舌診を行う環境についての注意点や、舌診時間を学ぶセクション（導入編）、(2) バーチャル患者が挺舌した本物の舌画像を観察して、典型的な舌所見を学ぶセクション（診断編）、(3) 症例を学ぶセクションを設けた。(2)の診断編では、初級、中級、上級を作成し、問題形式とした。

【考察】 AIを活用したバーチャル患者は、よりリアルな舌診学習を体感できる可能性がある。漢方医学に精通した薬剤師が身近にいない場合や、これから舌診を学びたい初学者や学生にとって、新しい舌診学習を提供できると考えられる。本教育動画の有用性について評価段階であるため、現在、協力者を募集中である（連絡先：TIAS.tongue@gmail.com）。

優秀演題候補セッション（口演）

2026年10月18日(日) 9:50～10:30 | 第8会場

[AO] 優秀演題候補セッション（口演） 2

座長: 灘井 雅行(名城大学薬学部 薬剤学研究室 教授), 関根 祐子(千葉大学大学院薬学研究院)

[AO-07] 災害対策用安定ヨウ素剤の使用方法に関する理解度調査および保険薬局薬剤師による服薬支援

竹島 幸亮¹, 小山 琢司², 佃 主税³, 重森 亮有樹⁴, 山崎 美佳^{5,6} (1.総合メディカル（株）そうごう薬局 安来店, 2.北堀店, 3.安来社日店, 4.東出雲店, 5.島根大学前店, 6.総合メディカル（株）)

【目的】震災が多発する近年、震災時に原子力発電所の放射性ヨウ素による甲状腺がんのリスクが懸念されている。原発付近の住民には安定ヨウ素剤（ヨウ化カリウム、以下、KI）が配布されるが、正しく使用方法を理解できているかは不透明な状況である。そこで今回、来局者を対象にKIに関する理解度調査を実施した。また、結果に基づき啓発資料を用いて説明する取り組みを行い、その効果について検証した。

【方法】2025年1月～5月の期間に島根地区のそうごう薬局5薬局に来局した原子力災害対策重点区域に在住の40歳未満の来局者に対して、KIに関する知識を問う選択式アンケートを実施した。アンケート実施後に啓発資料の配布及び口頭説明を行い、次回来局時に再度同じアンケートを実施して知識の向上について比較をした。

【結果】初回アンケートは114名から回答が得られた。正答率が高い項目として、KIの事前配布理由が41%、KIの保管方法が45%であった。一方、正答率の低い項目はKIが飲めない方の条件が0%、事前配布の申請方法が0%だった。資料配布後の再来局時のアンケートは42名から回答が得られ、42名全体の正答率は20%→57%へと上昇した。正答率の上昇が高かった項目はKIの主な目的が38%→93%、KIの事前配布理由が41%→91%だった。一方、正答率の上昇が低かった項目はKIの事前配布対象者の条件が5%→26%、KIの事前配布の申請方法が0%→24%だった。

【考察】初回アンケート全項目が正答率50%を下回ることからKIに関する住民の知識が不十分であることは明らかである。資料配布によりKIの主な目的や事前配布理由の知識向上にはつながった一方で、KIの事前配布の申請方法、必要となった際のKIの入手方法については依然として正答率が低い。今後は資料に加えた定期的な啓発及び口頭での説明など検討する必要があると考察する。

優秀演題候補セッション（口演）

2026年10月18日(日) 9:50～10:30 | 第8会場

[AO] 優秀演題候補セッション（口演） 2

座長: 灘井 雅行(名城大学薬学部 薬剤学研究室 教授), 関根 祐子(千葉大学大学院薬学研究院)

[AO-08] 医薬品の廃棄方法に対する薬剤師の介入効果の検討

齊藤 紗紀¹, 池端 たすく², 高橋 香奈³, 森山 愛理⁴ (1. (株) なの花北海道 なの花薬局札幌二十四軒店, 2. 小樽築港店, 3. まさかえ店, 4. 小樽稲穂2丁目店)

【目的】医薬品は不適切に廃棄されると環境中へ流出し生態系へ影響を及ぼす可能性があるが、日本では明確な廃棄指針は乏しく、患者の知識や意識の実態は十分に明らかでない。したがって本研究では、患者の医薬品廃棄に関する知識・意識の実態を把握し、薬剤師によるパンフレット指導が及ぼす効果を検討した。

【方法】小樽市内の薬局4店舗へ来局した18歳以上を対象に、2025年12月1～14日に廃棄方法を記載したパンフレットを配布し、12月15～31日に無記名自記式アンケート調査を実施した。両期間に来局した者を介入群、調査期間のみに来局した者を非介入群とした。主要評価項目は薬剤（7点満点）および包装容器（7点満点）の廃棄方法の正答数とし、Mann-WhitneyのU検定で比較した。副次評価項目の患者背景と廃棄に対する意識について、薬剤の正答数4点以上を目的変数とした多変量ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】解析対象者485人（介入群99人、非介入群386人）において、薬剤の正答数は介入群で有意に高かった（ $p=0.0328$ ）。包装容器の正答数および正答数合計（14点満点）では有意差を認めなかった。未回答を含めた感度分析でも同様の結果であった。副次解析では、介入有無（OR 2.57, 95%CI 1.41-4.70）、年齢65歳以上（OR 0.23, 95%CI 0.13-0.40）、使用薬剤数（OR 1.30, 95%CI 1.12-1.56）が薬剤の正答数4点以上と独立して関連していた。性別、回答者および廃棄に対する意識項目との関連は認められなかった。

【考察】パンフレット配布により、薬剤の廃棄方法に関する理解が向上した。包装容器の廃棄方法で差が認められなかったのは、日常のごみ分別知識と重なったためと考えられる。地域薬局における情報提供は、医薬品廃棄に関する理解向上に有用であり、環境保全および医療安全の観点からも薬剤師の役割は重要である。